

1. そういえばあんな日があったなあ

「まだ春になったばかりなのに、意外とあったかいな」

セーヤは自転車をこぎ、メガネを少し下に垂らせながらつぶやいた。下校途中である。

桜の花びらもまだ開いていないこの時期、いつもなら冷たい風が吹いているはずが、最近は温暖化のせいなのだろうか、生ぬるい風が吹いていた。

桜と言っても見られるのは学校の校庭か、近くにある名も無い低い山で見られるのみで、平地には何のおもしろみもないコンクリートが、ただ延々と続いている。横にも下にも。セーヤにとっては未だに慣れない光景であった。

もの心がついていた今から8年ほど前の小学3年生のころ、父カズマの仕事の都合で、田舎風情の漂っていた丸練という町から、都会びた高原市に引っ越した。

引っ越す当日の朝、セーヤは隣に住んでいた同い年で幼なじみのコトネに別れのあいさつを言いに行った。内気であるセーヤがクラスメイトにちょっかいをだされていると、いつも気の強いコトネが助けてくれた。そのお礼を兼ねてである。

「コトネちゃん」

いつものようにコトネを呼んだ。しかし、その後に「はい」と返してくれたコトネの声が、その時だけ聞こえなかった。まだそういうことにはウトい彼だったので、聞こえなかったのかな？ と、今度は今よりももっと大きな声で呼んでみた。

「コトネちゃん！」

そう呼ぶと、玄関のドアが静かに開いた。中からまだ髪がボサボサのコトネが出てきた。いつもならニカッと笑って出て来てくれたのだが、その時は目に涙を浮かべていた。目は真っ赤になっていた。

「セーヤちゃん、都会に引っ越すんでしょ？」

「うん、どうして知ってるの？」

「お母さんから聞いた。もう会えなくなるね」

「……お別れを言いに来たんだ。コトネちゃん、今までありがとね、いつも助けてもらって……」

セーヤの目からも涙があふれ出た。たくさん流れた。

「あえなくても、いつまでも幼なじみだからね」と、涙のせいでうまくしゃべれなかった2人は、お互いの目を見てそう最後に話した。

いつもより自然が残っている道を選んで帰る。2人で幼いころよく遊んでいた、両脇が一面田んぼの道を2人でよく並んで歩いた。そのときの気持ちが、もうすぐ高2となる今でも抜けきれずにいる。

この町で自然が残っている道というのは堤防くらいであり、そこを通るたびにそこに咲いている草花

を見てはため息をつく。左を見ると住宅がズラッと並んでいるので、とりわけ右を見るようにしている。そしてそこを通るといつも思う。「そういえば、あんな日があったなあ」と。

朝、家を出てから学校に着き、授業を受け、部活をしそして帰る。このサイクルの途中でセーヤはあの記憶を忘れてしまう。だから、堤防の横を通ると思い出す。

しかし、それは晴れて空が青く澄み渡っているからこそなのだが、曇りの日や雨が降っている時なんかはそうは思わない。青い空こそ、あの自然にベストマッチするのだ、とセーヤは考える。

「ただいま」

カズマを除いた全員がいる家に向かっていつも言うこの一言。今日のは明るかった。

「おかえり」と母ミキエの声がした。セーヤは2階に上がり、彼の部屋へと入っていった。部屋はきちんと片付いている。すると、たいていこの後ドアがたたかれる。

「お兄ちゃん、入るよ」

「うん」

妹のミミが、何らかの問題集を持って入ってきた。

「このところが分かんないんだけど……」

と勉強の質問をする。そうして教えているうちに夕ごはんの時間になる。

カズマの帰りはいつも遅いので、セーヤとミキエ、ミミ、そして祖母のウミと4人でいつも食べる。祖父のカヨエモンは2年前に他界した。

夕ごはんが終わった後、いつも居間でセーヤはテレビを見るのだが、たいていミミがリモコンを奪っていてセーヤは好きな番組が見れないでいる。今日はある歌番組を見た。

「さあ、次は如月サツキさんです。はりきってどーぞ！」

とテレビの中の司会がしゃべり、さまざまな色の光とCO₂の煙との中から、若い女性1人が出てきて、勢いよく歌いはじめた。その歌を聞いて、聴衆たちはその歌のテンポにあわせてテンポよく手をたたいた。肩まである長い茶色の髪をブンブン動かして、その歌手は激しく踊り歌っていた。

「こんな歌が今人気あるのか〜」と、セーヤは半分不思議に思って聞いていた。

「さて、次は初登場、テロップの出番です」

そして4人の若者たちが出てきて、司会の人と話していた。

「そういえばさっきの女の人……、気のせいかな」

次の日、学校でクラスの半分はこんなことを話していた。

「なあ、きのうのあれ、見た？」

「ああ、見たよ。如月サツキ、かわいかったよな」

「そうだよな。次のテロップもかっこよかったぜ」

「エー、やっぱり私はゲンゴロウかな」などなど。

最近の歌番組は、今の時代の若者に絶大な人気を与えていた。

突然、生徒の1人が教室に入って叫んだ。

「おい、みんな、今度、如月サツキがこの学校に転校してくるって！」

「え～！？」

「マジで～！？」

教室はおろか、学校中にこの噂が広まった。

2. ありがとうございます。

「なっ？ つまり前置詞の後は必ず名詞句が来るから、動詞をつけたかったら ing を付けて名詞にしなければいけない。なっ！？ もう一回言うぞ！ ……」

いつにも増して英語の五十嵐先生がはりきっていた。いつもは髪がボサボサだが、今日はきっちりと七三分けが決まっていた。しかしあいかわらず声は大きい。

それだけではなかった。クラス中の生徒、そればかりでなくたぶん、この学校の生徒はみな、緊張とワクワク感があった。そう、如月サツキが転校してきたのだ。

時は3時間前の午前8時にさかのぼる。

いつものようにセーヤは登校してきた。そしていつもと同じ、人が全くといっていいほど通らない道を、自転車をこいで走っていた。

途中、自転車ごと倒れている女性を見かけた。

「どうしました？」

さすがに声をかけないわけには行かなかったので、尋ねてみると、肩まである髪が翻され、茶色をした瞳が言葉もなくセーヤの方に向かれた。そして、一瞬だけ目が合った。

「え、あ、あの～……」

「あ、その制服、僕と同じ学校ですね。……ん？ ひざをすりむいてますね。ちょっと待って下さい」

そう言うと、セーヤはかごに入れていたカバンをゴソゴソとあさり、中からばんそうこうを取り出した。

「はい、どうぞ」

セーヤは彼女にばんそうこうをさし出した。

「あ……、すみません……」

ボソッと彼女は言ってばんそうこうをもらった。その後、セーヤは「それじゃ」とだけ言って先を急いだ。

「あ、あのう……」

突然彼女が大声でセーヤに向かって言い、セーヤはブレーキをかけて後ろを振り向いた。

「あの、ありがとうございます」

「……いえいえ」

5分ぐらい経ったとき、セーヤの後ろから勢いよくさっきの彼女が自転車をこいで来た。

「はあ、はあ、……追いついた。すみません。私、高原高校に転校して今日が初めてなんです。だから、

ついて行っていいですか？」

「はあ、いいですよ。最近、有名人が転校してくるって聞いたけど、他にもいたんだな」

「……そういえば、名前、まだ聞いてませんでしたね」

「え？ ああ、僕は橋野っていいます」

「あ、私、赤吹っていいます。よろしく……。2年5組に入るんですよ、私」

「アレ！？ 同じ年なんですか、2年生って。僕も2年生なんですよ。クラスは違いますけど」

「エエ！？ そうなんですか！？ 私、てっきり3年生の方なんかと思ってました」

……と、ここまででは順調に会話もはずんでいた2人だったが、ここで切れてしまった。並進していた2人だったが、次第に彼女の方がセーヤの後方へとまわり、沈黙が続いた。

そうしているうちに、学校の校門が見えてきた。普段ならば学校の領域をあらわにする真っ白い壁も、今日は人がたくさんいて壁の白い部分が見えなかった。おおから、今日転校してくる如月サツキを眼前で拝んでみたい者どもの集まりなのだろうと思った。

セーヤが群衆の前を少しはずかしげに通っていると、急に女性たちの黄色い声と男性たちの「サツキちゃん」コールがはじまった。なんてさわがしいのだろうと思いつつも、どこに如月サツキがいるのかと、群衆の視線を逆にたどってみると、それはちょうどセーヤの方にあつた。

「もしかして……」と思い後ろを振り返ってみると、下にうつむきほおを赤面させた彼女が、黙ってセーヤの後について来ていた。

校舎裏の自転車置き場に自転車をとめたが、やはりそこでもこの学校の生徒たちはうるさかった。一応確認をとるためにセーヤは尋ねてみた。

「あの、赤吹さん？ もしかして……、如月サツキさん？」

「……な、何言ってるんですか！ きっと人違いですよ。似てるって何度か言われたことあるし……」

「そ、そうだよ。ゴメン、僕のカン違いだった」

本人がそう言っているのだから如月サツキとは別人なのだろうと、納得せざるをえなかった。しかしセーヤは、みんながみんな、ソックリな人にだまされるものだろうかと思いを抱いていた。

噂によれば、五十嵐先生は如月サツキの大ファンらしい。先生は2-5の英語もうけもっているのうれしいのだろう。といっても、まだ彼女がそうであると決まったわけではないが。

うるさかった英語の授業が終わり、友達のケンがセーヤに話しかけてきた。

「なあ、セーヤ、お前今日、サツキちゃんと学校来なかったか？ っていうか来ただろ？」

「え、来てないけど」

「うそつけよ。そんな照れることはないんだぜ」

「本当だって。だいたい彼女、如月サツキじゃないって言ってるし……」

と言いながら目だけで周りを見てみると、クラスの生徒がみなセーヤたちの会話に聞き耳を立てていて、それがセーヤには手にとるように分かった。

「え？ ってことは、セーヤ、お前彼女と話したのか!？」

「……う、うん。少しね。名前とかを言ったくらいで……」

「ちくしょー、セーヤに先をこされてしまった。俺も急いでアピールしないと……」

とつぶやいて、急いで教室を出ていった。その後、アピールに失敗したのか、ケンが生気を抜かれたような顔をして戻ってきた。

4時限目終了後、セーヤは急いでパンを買いに行って、そのまま校内の一番端、ある部室の裏にある大きな木の下で食べて、その後昼寝をするのがセーヤの日課だった。

「こんな所にいたんですか。探すのに苦労しました」

パンをほおぼりついていると、彼女がやってきた。

「何か僕に用でも？」

「い、いえ、別にたいしたことでもないんですけど……。隣り、座ってもよろしいですか？」

セーヤは縦に首を振った。

3. 信頼と告白の関係

「今朝は本当にすいませんでした。初めての登校なので少し緊張していたのかも……」

セーヤは沈黙を続けた。

「あの、いつも、ここでお昼を食べてるんですか？」

「……ええ」

少し低い調子で答えた。女性に対する免疫が全くといってよいほどないためである。最初に会ったときは、お互い初対面であったので軽い気持ちでいたのだが、今は違った。どう会話を続ければよいのか、どう彼女の問いに対応すればよいのか全く分からなかったために、「ええ」と一言しか口に出すことができなかった。それに対して、意外に彼女は積極的だった。

「あ、あの、もしかして、私、お邪魔でしたか？ それなら……」

「い、いや、お邪魔とかじゃないんだけど……」

「そ、そうですか？ ハア」

彼女は軽くため息をついた。風によって葉と葉のこすれる音しか聞こえなかったのか、彼女のため息はセーヤに十分聞こえた。その時、セーヤの中で小さな、とても小さな何かロックのようなものが外れた。そして彼は、再びあの質問を試してみた。

「あの……、しつこいようだけど……」

「はい？」

「あの……、赤吹さんって、本当に如月サツキじゃないんだよね？」

やわらかい口調で、彼女の方を向かずに、ある部室の壁のある1点を見ながら言った。

「……はい、そうですよ……」

そうとだけ、セーヤの質問に対する答えを言うとすぐに彼女は立ち上がり、彼のもとを離れた。「それじゃあ」などと一言もセーヤに言わずに。

その時セーヤは顔面を手で覆いかくしていた。（さっきも聞いたことなのに……）そう自分に言った。彼女の最後の一言は、とても低く、そして青かった。

昼休みが終わり、セーヤは教室に戻った。教室に入るやいなや、ケンが彼に怒鳴るような大声で彼に話してきた。

「おい、セーヤ！ 昼休みのとき、またサツキちゃんと話してただろ！？」

「え、どうして知ってるの？」

「それは俺はサツキちゃんのファンだからな。1秒でも長く愛しいサツキちゃんを見ていたいのださ」

「あ、そう。でも、それほど話してないよ」

「それでもいいよな～、サツキちゃんと話せて。俺なんかほぼ門前払いみたいなものだから」

「ハハ、……ん？」

セーヤが廊下側を見てみると、胸元に蝶ネクタイをしめ、何かの曲を口ずさみながら軽快にステップをふんでいる五十嵐先生が、たいそうご機嫌良さそうに2-3横の廊下を歩いているのを見た。次は2-5での授業なのだろう。

「なあ、ケン。見たか？」

「……ああ。あかにだけはなりたくないよな」

そして5時限目の授業が始まった。安易に予想できたことだが、五十嵐先生の声が2-3のクラスまで、2-4と1クラス分あいているのに聞こえてきた。そのせいで化学の授業だったのに、まるで英語の授業を受けているようだった。

放課後、セーヤは所属している吹奏楽部の練習、つまり部活へと行った。特に楽器が好きとか音楽が好きとかではなく、ただやってみたくてという気持ちでこの部に入部した。活動場所は第3体育館の裏の吹奏楽部とオーケストラ部の共同練習場なる施設があって、そこの2階で彼はいつもトランペットをふいていた。それほど上手くも下手でもなく、きわめて中間点に近いウデだった。

「先輩、あの如月サツキさんと話をしたそうですね」

と言ってきたのは、セーヤの後輩にあたりフルートをふいているリホだった。

「秋瀬さん、どうしてそれを？」

「だって先輩、今日の朝如月さんといっしょに学校に来てたじゃないですか。話をしていないほうがおかしいですよ」

「……はっ、そうだよな」

セーヤは別にアセル必要のないこのときに、なぜかアセってしまった。

「べ、別にたいしたことは話してないんだ。うん、別に……」

そう言っただけよりも大きな音をたててトランペットをふいた。リホはセーヤが吹き始めたのを見て、フルートのパートに戻っていった。3年生の、彼から見て先輩にあたる人たちは今日も部勧誘で忙しかった。今日はたぶんど部の勧誘をしているだろう。

辺りが少しずつ赤くなって行って、セーヤは再び自転車をこぎだした。今度は1人である。今練習をしている曲を口ずさみながら、セーヤは1人、左手に赤く赤くもえる太陽が見えながら自転車をこいだ。今日は向かい風がふいていて、いつもより余計に時間がかかった。

1人である。

セーヤは家につくと、「ただいま」とも言わずにそのまま家に入り、2階にのぼって無言で自分の部屋に入った。

「お兄ちゃん、おかえり〜」

部屋にはミミがいた。何か調べものをしているようである。

「お兄ちゃん、漢和辞典借りてるよ」

「……あ、うん……」

ミミは何か気づいたようにセーヤに言った。

「お兄ちゃん、何か今日元気ないね」

「……やっぱり、ミミには分かるか？」

「うん。もうだいたい15年の付き合いだしね」

ミミはあくまでも明るくセーヤに接してくれた。

「……罪悪感って奴なんだよ」

「ふ～ん……」

それ以上、根掘り葉掘り聞こうとはしなかった。そして、辞書を持ってセーヤの部屋を出た。

次の日も、その次の日も、セーヤは同じ道を通って登校した。学校では彼女は人気者であるため近づけない。だから、彼女に合うには朝か昼だけなのだ。

(ただ、もう一度会って謝りたいだけなのに……)

そう思いつつも、現実ではそうとはいかなかった。

あれから2週間と少しが過ぎた。未だセーヤはたちなおっておらず、悪いことをしたなと思ってばかりいる。

4時限目が終わり、いつものようにあの場所に行くと、そこに彼女の姿があった。木の方を向いてうつむいている。一瞬かたまったセーヤだったが、彼女に近づいて行って、言った。

「赤吹さん……、あの……」

次の言葉が出なかった。どうしても彼女に言わなければならないことがあったのに、なぜかその言葉が出なかった。

「え、あ、あの、あのですね……」

「何？ 橋野君」

彼女が振り返り、ほんの一瞬だけ目が合ったがそれが2秒にも3秒にも長く感じた。それはセーヤだけではなく、彼女も同じだった。

「えっと、ですね～。この前は……、ゴメンナサイ」

「？ どうして謝るの？」

「いや、あの、この前しつこく赤吹さんに尋ねたじゃないですか。『如月サツキじゃない？』って……」

「ああ……、そのこと。別になんとも思っていないですよ。逆に謝るのは……」

しばらく間をあけてから言った。

「謝るのは私のほうなんです」

「え？」

急に突風が吹き、セーヤはメガネがとばされそうになった。

「実は私、橋野君に嘘をついてました。本当はあなたの言うとおりのなんです。みんなの言うとおりの、私は“如月サツキ”なんです」

「……それだったら、どうして嘘なんか……」

再びセーヤに背を向けて答えた。

「……私、“赤吹ユズカ”っていう名前なんですよ。“如月サツキ”はもちろん芸名なんですけど、前の学校では友達のみんながみんな、私を“サツキ”って呼んでくるんです。デビューしたてのころにその学校に転校して、そう呼ばれるのも仕方ないなって思ってたんです。けど、だんだん私は“赤吹ユズカ”ではなく“如月サツキ”になっていってるような気がして……。誰も私を“赤吹ユズカ”って見てくれないんじゃないかなって感じがして……。それで、思いきってこの学校に転校してきたんです。初めて橋野君と会ったとき、私を“赤吹”として見てくれてうれしかったんです。せっかくこうした人に出会えたのに、“如月”って言われるんじゃないのかと不安になって……。だから嘘をついたんです。せめて、せめてあなただけでも、私を“赤吹ユズカ”として見てほしかったんです」

震えた声でユズカは話した。目からは大粒の涙が出ていた。信頼できる唯一の人間に悩みを告白できたことで、今までクサリに縛られ続けていた純粋な心が、今ようやく解き放たれたのだ。心の底から安心感が湧き出てきたのだ。

ゆずかは涙を袖でぬぐって、セーヤに一通の封筒をさしだした。

4. 積もる話

「なんですか？ これは」

「いいから、中を見て」

言われるがままにセーヤはユズカから手紙を受け取り、ひと回り封筒のまわりをながめたあと、中をのぞきこんだ。すると、一枚の折りたたみである紙切れが見えた。セーヤは指を入れてその紙を取り出し、広げてみた。すると、きれいな字でこう書いてあった。

橋野君へ

お久しぶりです。元気にしてた？

突然こんな手紙を出して驚いているでしょう？

もうあなたが引っ越してから、8年もたつんだよね。

ゴメンね、今までちっとも手紙を出さなくてね。

8年前は、いつもセーヤくんはクラスの男の子にいじめられて、いつも泣いていたよね。

そして、私の後ろにかくれて私がいつも助けたよね。

今のセーヤくんはどうなっているのか、私はとても心配で……。

たぶん、私が想像もつかないようなカッコイイ男の子になっているかもネ！

話は変わって、どーして急に手紙を出したかっていうと、実はビッグニュースがあるからなの。

それはね……、

私も引っ越すことになったんだ！ それもセーヤくんと同じところに。

今いるところはもう人がちっともいなくなっていて、いわゆる“過疎化”ってヤツ？

それで私たちも引っ越すことになってね。

アテもないから、どうせならセーヤくんたちと同じところに行こうってことになったの。

ホント、いいかげんな親だよね。

そんなことだから、もうすぐセーヤくんに会いに行きます。

セーヤくんの今の姿、期待してるからネ！

野原より

「……野原？ だれだっけ、野原って」

「え、知らないの？ 知ってるはずですよ」

「ええっと……。野原、野原っと……。アッ！ 思い出した！ そうだよ、以前引っ越す前での隣に住

んでた、コトネちゃんのことか！」

セーヤは驚いた。8年ぶりの2人の会話だった。

「？ でも、どうして赤吹さんが持ってるんです、この手紙」

「……だって私、彼女のいとこだから」

「！！ エェーッ！」

セーヤは再び驚いた。そして、なんて世界は小さいんだと思った。

「実は、今日はその手紙をわたそうと思ってここへ来たんです。ここにいれば、きっと来てくれるだろう。そう信じてましたから。でも……、今日はうれしかったです。何かスッキリしました。ありがとうございます」

そういうと、ユズカはセーヤのもとを離れていった。セーヤは右手に手紙を持って、肩の力が抜け、ただボーっと1点を見ていた。いろいろなことが一度に起こったせいで、セーヤは頭がパニックになっていた。昼休みの終了を告げるチャイムが鳴ったとたんにセーヤは我にかえって、そして急いで校舎へと戻っていった。

吹奏楽部は強制活動をしいる部ではない。だから、セーヤは今日は部活を行わずに帰ろうとした。

「先輩、今日は部活、やらないんですか？」

セーヤが後ろを向くと、追ってきたのか、汗だくになったリホがいた。

「……うん。ちょっと今日は気分が悪いんだ」

「大丈夫ですか？ 1人で帰れますか？」

「ハハ……、大丈夫だよ。先輩に聞かれたらそう言っといてね、秋瀬さん」

セーヤは自転車をこぎ出した。ペダルをこぎながら、今いる高原市へ引っ越し日を思い出していた。コトネが、彼女の両親といっしょに僕たち家族を見えなくなるまでずっと、ずっと見送ってくれたあの日。セーヤは不安になった。

「サツキさん、サインください！」

そのころユズカは、吹奏楽部の3年生につかまりサイン攻めにあっていた。転校してからけっこうたつが、それでも如月ブームはさめなかった。

「せっかく来たんだから、何か楽器でも吹いてみない？」

「いいんですか？ それじゃあ……、トランペットを」

ユズカは先輩にトランペットのパートへ連れて行かれた。

「ええっと、トランペットは……っと。そういえば、今日は珍しく橋野君が来てないわね」

すると近くで練習していたリホが来て言った。

「橋野先輩なら、気分が悪いとかで帰りましたよ」

「へえ～、ふられたりでもしたのかな。な～んてね。ハハハ……。ん～しょっと、あったあったトランペット。……あれ？」

そこにはユズカの姿がなかった。ユズカは走って2-3の教室に行ってみたが、セーヤの姿はあるはずもない。すると、そこでもサイン攻めにあってしまった。

(……橋野君、もしかして……)

ユズカには、セーヤが気分が悪くなる心あたりがあった。それは単に一度にたくさんのが起こってパニックになっていることではなく、8年間の差をどれだけ相手に埋められるかという自己不安からなっているのかも悟った。ユズカは、コトネとはよく電話で話していた。そこでユズカがセーヤのことを出したのが事の発端だった。セーヤとコトネと電話でやりとりをすればよかったのだが、コトネの願いで手紙をわたすことになったのだ。「どうせなら、お互いちゃんと会う時までね」……と。

ユズカはセーヤを、精神面でも信頼している。しかしそれに加えて、新たな感情か今、湧きあがろうとしていた。それは愛情というものではないが、確かに、セーヤを意識するようになった。

ユズカの考えは半分当たっていた。セーヤは家につくなり、自分の部屋に閉じこもった。

「お兄ちゃん、帰ってきたの～？」

返事がなかった。ミミはさらに言う。

「お兄ちゃん、今からミツル君と行って来るから、お留守番しててね。それじゃあ行こう！」

「ミミちゃんのお兄さん、何も言っていないけど大丈夫なのか？」

ミミはこっくり首を縦に振った。ミミとミツルは付きあって1年も満たない。しかし、ミミとセーヤは一つ屋根の下で15年近くもいっしょにいる。ミミには分かっていた。だから深くは言わなかった。

そのときセーヤの部屋のドアが急に開いた。2人はビクビクして振り返った。

「……天念君、ミミを、妹を頼むよ……」

そうとだけ言うと、セーヤはドアを閉めて静かになった。ミミは微笑んでミツルを連れて出かけていった。セーヤは窓からその光景を見ていた。セーヤはなぜかほころびた。

翌日にはセーヤはいつも通りに戻っていて、普通に授業を受け普通に休み時間を過ごし、普通に部活動をしていた。

一週間ほどたったある日、桜も散りさわやかな時期に入った頃、あることが起きた。それは高校全体を揺るがすほどの大事件となった。それは、如月サツキが吹奏楽部に入ったということだった。過激なファンは自分の所属する部活動に彼女が入らなかったことにショックし、中には2日ほど寝こんだ者もでた。しかし、何より驚いたのが吹奏楽部員。その中でもセーヤは、人並み以上に驚いた。パートは先輩からのたつての希望でクラリネットとなった。しかし、少しずつではあるが日に日に如月ブームが終

わろうとしていた。“如月サツキ”がいること自体がもう普通であるようになっていったのだ。サインや握手をねだる者も減少していった。しかし、ユズカにとってはあまりうれしくないことだった。彼女にとってみれば、如月サツキで定着されるのは嫌なのである。「私は1人の女。赤吹ユズカっていう1人の女」でありたいと願うのだが、世間体ではそのような願いも無力だった。

そんな彼女が、唯一校内でホッとする時間帯というのが部活動のときだった。ここではセーヤのおかげでもあるのか、けっこう彼女をユズカとして接してくれていたのである。ユズカにとって、これ以上の幸せはなかった。

部活がいっしょからなのか、最近はセーヤとユズカと、2人で帰ることが多かった。話すのは一方的にユズカであって、セーヤは聞き側にまわっていたが、そのたびに明るくなったと思うのであった。

さらに一週間ほどしたある日、その日がやってきた。途中ユズカと分かれて1人で家に帰ると、家の前に1人の女性が立っていた。その女性はセーヤに気づいたのか、セーヤのほうを見ると手を振った。その女性の前で自転車を止めた。

「うわ〜、大人っぽくなったね、セーヤくん」

「……も、もしかして、コトネちゃ……、いや、コトネさん？」

「もしかしてってどういう意味？ 久しぶりだねえ。もう離れてから8年よ。長いね」

「そっかあ、本当に引っ越してきたんだ。コトネちゃ……、コトネさん」

「クスッ、……コトネちゃんていいよ、セーヤくん」

セーヤはドキドキしていた。セーヤの記憶にある小3のコトネと、今目の前にいる高2のコトネとでは、あまりに違って大人らしくなった、というか、一段とかわいくなった、というか、1人の女性になっていた。

「ユズカから話には聞いていたけれど、あの泣き虫がこんなになるなんてね」

「ハハハ、そういうコトネちゃんこそ大人っぽくなったじゃない。あの頃とは比べものにならないくらい、かわいくなって」

「何、それでも口説いてるつもり？」

「そんなんじゃないって……」

2人は玄関の前でけっこう長い間話をしていた。今、歯車が回りだした。

5. 序曲（プレリュード）

コトネが引っ越してから数日たった。コトネもあの高校に転校したが、彼女の姿はあれ以来一度も見えていなかった。彼女との会話を交わしたあの日、セーヤはコトネから彼女の携帯電話の番号をもらったのだが、セーヤはその番号をかける勇気がなかった。

コトネは彼からの電話を待っていた。別に毎日かけてくれなくてもいい。ただ、セーヤの声を聞きたいだけだった。とはいっても、それは彼女がセーヤのことを好きだと思っているのではなく、8年間の空白があったために、彼と再会できた懐かしさという方が、彼女のその心情にふさわしかった。

ユズカは、仕事の休みの日などはよくコトネのところに遊びに行った。そして2人でよく外へ出るのが、ユズカは人にばれると悪いからと思っていつもサングラスをかけ、ぼうしをかぶる。すると、意外なほど如月サツキだとはばれないので、2人はカラオケに行ったりショッピングに行ったりと、少ない休みを心の気晴らしにとあてたのであった。

あれから一週間ほどたった。夜9時過ぎに電話がかかってきた。ミミが出た。すると、

「お兄ちゃん、でんわー」

と、セーヤを茶化しているかのような声で呼んだ。セーヤは階段を下りた。するとミミが、

「お兄ちゃん、がんばって！」

と、意味深な言葉を発した。

「はい、もしもし、代わりました」

「……セーヤくん、どうして電話掛けてくれないのよ。私、待ってたんだから……」

コトネの声だった。

「いや、別に電話しても話すことなんて何もないし……」

「……そう、そうよね。ゴメン、邪魔しちゃって。じゃあね、またあした」

電話が切れた。セーヤはあまり意味が分からずに受話器を戻し、二階へ上ろうとした。するとミミが、
「どうだった、お兄ちゃん。意外に早かったけど」

「……何が？」

「何がって……。あっ、なるほど、そーいうことね……」

ミミだけが妙に納得して、セーヤはさらに頭が混乱した。

次の日、セーヤがいつもの道を登校していくと、この前、初めてユズカと会ったあの日と同じ所で、ユズカがまたころんでいた。

「赤吹さん、またこんな所でころんでたんですか？」

そう言って見てみると、彼女にはころんだ形跡がどこにもなく、セーヤの方を向いて言った。

「ころんだんじゃないんです。この場所が懐かしくなって、つい……」

セーヤは一つだけため息をつくと、

「それじゃあ、お先に」

と言って、再び自転車をこぎ始めた。ユズカはその後ろ姿を、彼の姿が見えなくなるまでずっと見ていた後静かに立ち上がり、倒れていた自転車を起こして学校へと向かった。

学校ではコトネのことが密かに話題になっていた。そのたいていは転校生ということだが、男子の中には彼女に思いを寄せ始める者もでてきた。女子の中には、彼女のあの根っからの明るさに惹かれる者がでてきた。コトネは彼女のその性格のよさで、男女を問わず多くの友人を得た。その中にはケンもいた。

「なあ、セーヤ、この前転校してきたコトネちゃん、あの子かわいいよなあ」

「へえ～、そうなの」

その時セーヤは思った。幼なじみであるなんてばれたら、絶対殺されるな……と。

「如月サツキの方はどうなるんだよー」

「サツキちゃんの方はファンだからな。コトネちゃんとなら全然OKさ」

「……いいかげんというか、ゴーインというか……」

「なに!？」

「え、いや、……何でもないです」

昼休みになってセーヤはいつものようにあの場所で、パンをほおぼっていた。

(何でこんなことになってしまったんだろう)

その時コトネがやって来た。

「! コトネちゃん、どうしてここに……」

「ユズから聞いたからね。セーヤくんならお昼ごはんはいつもここで食べてるって……」

コトネは息を整えた後、セーヤの隣に座った。2人はしばらく沈黙しながらごはんを食べていたが、セーヤがこの沈黙を破った。

「この8年間、コトネちゃんは何してた？」

「ぎこちない話し方だった。」

「私? そんなの普通だよ。小学校行って中学校に行って、卒業したら高校に行って……。その頃から村のみんながどんどん都会に出ていくようになってね」

「う～ん、そうじゃなくて、思い出っていうのかな。何か特別なことでもあった？」

「特別なことねえ……。あっ! そういえば中3のとき合唱コンクールっていうのがあったんだけど、それで私たちのクラスが優勝してね。それで先生が私たちにおごってくれたんだけど、何をおごっても

らったと思う？」

「う～ん、分からない」

「それはね、……“シベリアンK₂”！」

「シベリアンK₂? 何それ？」

「そうだよね、知らないよね。シベリアンK₂なんて。なんか、栄養ドリンクらしいんだけど、誰も知らないから素直に喜ばなくてね。そうしたら先生が逆ギレしちゃって、『お前ら、飲め!』ってオドされちゃって。それで私たちがそれを飲んだらとってもマズくてね。後で分かったんだけど、シベリアンK₂って先生が作ったもので、主原料が片栗粉! それはマズイはずだって思ってね。後で先生に抗議したのね。そしたら先生が『ゴメンゴメンゴメリンコ!』って、わけの分からないことを言ってね。あれが一番おもしろかったなあ」

「ハハハ……、その先生、おもしろい先生だね。ゴメンゴメンゴメリンコって。……ククク、ハハハ」

「修学旅行のときにもその先生がシベリアンK₂を作ってきてね。それで……」

「ハハハ……。それはダメでしょう。ハハ……」

2人は以前の仲のよい幼なじみに、少しずつではあるが近づいていた。その2人の楽しそうな様子を、陰である人物がのぞいていた。

「……何で、何であのセーヤがコトネちゃんと仲がいいんだ!? セーヤなんかよりよっぽど……」

セーヤは突然背筋がゾクッとして、周りを見回した。すると、ある人の影が逃げていくのが見えた。その影の髪型にセーヤは見覚えがあった。

「どうしたの? セーヤくん」

「う、いいや、なんでもないよ(まさか……な)」

その人物はセーヤに感づかれたと察し、早めに逃げだしていたのだ。

「……セーヤ、要注意だな」

2人は盛り上がっていたのだが、時間といった障害にぶつかった。

「さてと、そろそろ戻らないと。5時限目が始まる」

「もう戻るの? もう少しいっしょにいようよ」

「い、いや、次の授業は遅れたらヤバイんだ。先生が怖いから……」

するとコトネは、それじゃ仕方ないと言わんばかりの顔をしてゆっくりと立ち上がった。背中とお尻を手で払って、セーヤの方を向いて言った。

「それじゃ、また後でね」

コトネは桃白の布でつつんだ弁当箱を持って走って教室へと戻っていった。

「『また後で』って……?」

セーヤが教室に戻ると、セーヤの席に腕を組んでケンが座っていた。ケンはセーヤが戻ってきたこと

に気づき、セーヤの方へ近づくと、

「放課後、屋上まで来てくれないか……？」

小声で、それでもって低い声で言った。

「う、うん……。いいよ」

セーヤはおそろおそろうなずいた。彼のあのような態度をみたことはなかった。

5、6時限目の授業の間にチラチラとケンを見てみると、その時のケンの態度に邪な感じはしなかった。さっきのあれはきっと気のせいだと思うしかなかった。

放課後、セーヤは約束どおり屋上へと足を運んだ。屋上は風がきつかった。ケンがそこにいた。彼は一息つけてから言った。

「来てくれたか、セーヤ……」

「う、うん、それで、何のようなの？」

ケンは下を向いて答えた。

「セーヤ、お前はコトネちゃんを知っているな？ 知っているんだろ！？」

「……うん、知ってる。別にかくすつもりじゃなかったんだ。言いそびれただけで……」

「そっか……。でも、そんなことなんてどうでもいい。俺は、お前はコトネちゃんの何なのか、それが聞きたい。何なんだ？」

「……僕は、コトネさんの……？」

ケンはこっくりうなずいた。セーヤの顔を、いつもとは違う真剣な目つきで見ている。

「……僕は、彼女の単なる幼なじみだよ」

「単なる幼なじみ？」

「そう、幼なじみ。8年、間があっただけ……」

セーヤはそうとしか言えなかった。ケンはセーヤに背を向けて大声で笑うしかなかった。

6. “幼なじみ”の定義

ケンはずばらく笑った後セーヤの方へ寄り、セーヤの背中を数回軽くたたいた。

「ど、どうしたの？ 突然笑ったりして……」

「え、いや、何でもない。そうか、幼なじみだったなんてな。そこまでは考えつかなかった」

「え？」

ケンは一言ゴメンなどと言うと、すぐに行ってしまった。セーヤは1人、運動部の声が傍らから聞こえてくるだけだった。

その日の放課後、1人で自転車小屋へ行くとケンとコトネの姿があった。何か話をしている。セーヤは悪いとは思いながらも、陰から2人の様子を見ていた。

「あのさ、野原さん。実は……」

「何？ 石部君」

ケンはズボンを強く握りしめ、顔をうつむかせ、彼女に視線を合わせないようにして言う。

「ええっと……、その……、話っていうのは……」

「だから何なの？」

ほおをほのかに赤らめ、下唇をかみ、何かを伝えようとがんばっている彼の様子がセーヤにはビシビシ伝わってきた。2人の間の空気が張りつめていた。

「……野原さん！ 俺、いや、僕と付き……」

「橋野君！ 何してるんです？ そんな所で」

大声でセーヤを呼ぶユズカの声が響いた。張りつめていた空気は一瞬にして再び流れ出し、2人は彼の方を向いた。その時のケンの顔つきにセーヤは恐怖を悟った。

「……で、何？ 石部君」

コトネが話を元に戻した。ケンは我にかえりとうとう言い放った。

「野原さん！ 僕と付き合ってください！ お願いします！」

頭を下げている。セーヤには、その姿が勇ましく思えた。しかしその反面、コトネがどう返答するのか不安になった。

「……」

コトネはずばらく黙っていた。その間、ケンは頭を上げられずにいた。意外に純粋な奴だなとセーヤは感じていた。コトネは一瞬だけセーヤとユズカの方を見ると、こう応えた。

「……うん。いいよ」

「！ マジ！？ ヤッター！」

ケンの顔はさっきの恐ろしいのとは裏腹に、笑顔で満ちあふれていた。セーヤは複雑な気持ちになっ

た。

「……幼なじみは、いつまでたっても幼なじみか……」

誰にも聞こえないくらい小声で、しかし彼の心には心全体にしみわたるような弱い声でセーヤは言った。無常にもチャイムが鳴った。

次の日から、休み時間中にケンとコトネが話をしている光景を度々見るようになった。セーヤはその度、できるだけ2人が視界に入らないように努めた。

数日後、セーヤの家に電話が鳴った。たまたまセーヤが受話器をとると、電話の主はコトネだった。

「コトネちゃん……。何か用でも？」

「実はさ、来週の日曜にケン君とデートすることになってね。私、初めてのデートだから……」

コトネはケンとの話をいろいろしていた。セーヤはそれに、ただ相づちを打つしかなかった。

(どうしてこんなことを聞いているんだ?)

セーヤは一方向的に話す楽しそうなコトネの声を聞くと、たまらなく寂しさがこみあげてきた。

布団の中で、以前あの場所でコトネと話していた時のことを思い出した。するとふと気づいた。

(そういえば、あのときとさっきのとの声の感じが違ったような……)

しかしそれはどうでもいいことだと思い、就寝した。

次の週の月曜、学校でケンがセーヤに話しかけてきた。

「あのさ、セーヤ。お前、コトネちゃんのことどう思ってる？」

「えっ？」

予想もしなかったこの質問に少し戸惑った。

「え、えっと……。別にただの幼なじみだって思ってるけど」

「そうじゃなくて、お前の本当の気持ちのことさ」

「本当の……。気持ち？」

「そう、本当の、正直な気持ちだ」

考えたこともなかった。いつもいつも、ただの幼なじみで片付けていた。

「……実はさ、きのうコトネちゃんと映画観に行って……。ほら、今話題の“ラブ・オブ・プラネタリウム”ってやつ。その帰り道で彼女と話してたんだけど……。彼女の話の中に必ずと言っていいほどお前がでてくるんだよ。その時の笑顔、俺に見せたことのない笑顔でさ……。だから俺、思いきって聞いてみたんだ」

「……何を？」

「『もしかして、セーヤのこと好きなのか』って……」

「……」

「そしたらさ、違うって言うんだよ。単なる幼なじみだって。『幼なじみは、いつまでたっても幼なじみだから……』って」

「！ そう、だから僕も言ったでしょ？ ただの幼なじみだって」

「……そうか。そうだよな。ゴメン。俺の勝手な思い違いだった。今のは忘れてくれよな」

忘れたくても忘れられなかった。何らかの強烈な衝撃がセーヤの体中を巡ったように感じた。

「先輩！ どうしたんですか？ 元気ないですよ～」

トランペットを吹かず、ボーっとしていたセーヤにリホは声をかけた。

「……秋瀬さん。そんなに元気ないように見える？」

「はい！ もう、その声からしてブルー一色ですよ～。何かあったんですか？ よかったら相談にのりますよ」

「……秋瀬さんは、幼なじみとかがっている？」

「幼なじみですか？ いますよ。年下ですけど。今、彼女がいるらしいんです。誰かは教えてくれませんかけど」

「……彼女がいるっていうことは、男の子なんだ」

「はい。まだ中学生なんですけど、憎らしいですよ～。はあ、私も彼氏ほしいなあ」

「えっ？ 秋瀬さん、彼氏いないの？」

「いませんよ～」

「そうなんだ。いるんだとばかり思ってた……」

「……そうだ。先輩、私の彼氏になってくれませんか？」

「……冗談だよ～？」

「……あ、ばれちゃいました？ アハハ……」

リホは苦笑いをした。セーヤは明るくふるまってくれたリホを見て、トランペットを吹き始めた。リホは自分のパートに戻っていった。そこで同じパート仲間に聞かれた。

「ねえ、リホ。リホって橋野先輩と仲良いよね」

「ええ！？ そんなことないよ」

「でもさ～、よく先輩と話してるじゃない。もしかして、先輩のこと……」

「ち、ちがうわよ。そんなんじゃないって」

「さ～て、どうだかね～」

「もう……」

今日の部活にはユズカの姿が見られなかった。仕事で番組の撮影があるためである。彼女は、授業が終わり仕事先に行く前にセーヤに、

「コトネちゃんを信じてあげて下さい」

と言った。セーヤはトランペットを吹きながら、ユズカの言ったこの意味を考えていた。

「は～い、サツキちゃん、いるか～い？」

奇妙な声で突然、生徒会長のタダスミがやって来た。ユズカが吹奏楽部に入部したときから、彼はちよくちよく姿を現すようになった。サツキファンクラブ名誉会長というだけあって、そのストーカーぶりには目をみはるものがあった。周囲の者は、本当に彼が生徒会長でいいものなのかと不安になってきている。

「飛地君、今日は赤吹さんは来ていないけど」

「またまた～、そんな嘘ついたって、僕チンはダマされないぞ～」

ほとんど変体同然である。部員の中には選挙のとき彼に票を入れた人も数多くいるわけで、どうしてこんな人に票を入れたのだらうと思っていた。セーヤもその1人である。

「また来たか、あの人。いつも追いかえすのが大変なんだよね～」

みんながみんな言うことである。容貌的には何の問題もないのだが、ユズカがこの学校に転校して以来、いわゆるバカになったのである。

「ちえっ……、本当にいないのか、残念」

こうして20分ほどユズカを捜したあと本当にいないことが分かると、戻っていった。

それと入れ違いにコトネがやって来た。

「セーヤ君、ちょっと……」

セーヤはトランペットを椅子の上に置いて外に出た。そして全く人気のない所へ連れて行かされた。

「何か用ですか？」

振り返ってコトネを見てみると、涙を流していた。そして突然、セーヤに抱きついてきた。

「ど、どうしたの？ コトネさん……」

「……あのね」

この光景を、密かに後をつけていたリホとパートナー仲間が目撃していた。

「……そ、そんな……」

7. 空虚なる心

「あのね……、セーヤ君……」

静かに話し始めた。リホはその光景を陰でまじまじと見ていた。

「……本当は嫌なの」

「何が……ですか？」

「……ケン君と付き合うことが。あの時はケン君を傷つけないと思って、自分の気持ちを考えていなかった」

「……どういうこと？」

「……別にケン君のことを好きだと思っていないの。ケン君と付き合うぐらいだったら私は……」

「え？」

セーヤは耳を疑った。そして、ほのかに赤面した。

「そ、そんな、僕は無理だよ。だって……」

「『幼なじみだから』でしょ？ 分かってる。それは私も分かってる……」

更に強くセーヤを抱きしめる。そして数秒後、コトネは何か気づいたかのようにセーヤから離れた。

「ゴ、ゴメンね。シャツがぬれちゃって……」

そう言いながら顔をうつむかせ、赤くなり、涙をぬぐう。その仕草が女性そのもので、セーヤは胸が苦しくなった。

「そ、それじゃあ、僕はまだ部活中だから……」

「あ、う、うん。ゴメンね」

セーヤはその場から逃げ出した。こっちに近づいてくるセーヤを見て、リホたちは急いでパートの所へ戻った。

セーヤが戻ってきたのを確認して、リホは何も知らないような顔をしてセーヤに話しかけてきた。

「先輩、何だったんですか？ さっきの人、もしかして彼女ですか？」

「え、そんなんじゃないよ！」

セーヤは声を張って言う。

「僕とあの人は、単なる幼なじみさ……」

「あ、そうなんですか……。あ、だからさっき私に幼なじみのことを聞いたんですか？」

「……う、うん。そう、そうなんだ」

セーヤは黙り込む。

「今日は本当に元気ないですねえ、先輩」

「！ そういう秋瀬さんこそ、さっきより元気がないように思えるけど。……気のせいだよなあ」

「そ、そうですよ。私はいつでも元気です！」

その日の夜、ミミが電話で誰かと話をしているのが聞こえた。内容からして、おそらくミツルであるだろうことが予想された。別に盗み聞きをするつもりはなかったが、セーヤは付き合っている人はどうしているのか少し興味があったので、妹には悪いが聞いていた。しかし、もちろんミツルの声が聞こえてくるはずもなく、結局よく分からなかった。だが1つだけはっきりとしたことは、ミミが楽しそうに話していたことだった。

「そんなものなのかな～」と独り言を言った。

電話を切ったらいいのか、ミミの部屋の扉が開く音がした。するとセーヤの部屋に入ってきた。

「お兄ちゃん、ミツル君が代わってくれって」

セーヤは不思議に思いながらでた。

「あ、す、すみません。あの、1つ聞きたいことがあるんですけど……」

セーヤに思い当たる事はなかった。

「えっと……、秋瀬リホって人、知ってます？」

「ああ、知ってるよ。でもどうして君が……？」

「リホお姉ちゃんと僕、幼なじみなんですよ」

「ああ、君がか……」

「いや、そんな事じゃなくてですね、実はお姉ちゃんから聞いてほしいって事があって……」

セーヤは疑問に思った。普段なら部活の時に聞いてくるのだが、彼を通して聞いてくるとは何か聞きにくいことに違いないと考えた。

「リホお姉ちゃん、好きらしいんですよ」

「……？ 誰が？ ……もしかして、僕のこと？」

「はい、そうです」

セーヤはしばらくの間、何が起きたのか分からずミツルの言葉にも反応できなかった。

「……はは、冗談だろ？ 秋瀬さんが……」

「いえ、本当ですよ。お姉ちゃんのあの表情、真剣そのものでした」

意外とズバズバと言うミツルだった。セーヤは正直困った。

「それで、彼女は何だと？」

「はい。返事を聞いてって言っていました」

予想通りであった。セーヤはどうしようと思った。別に嫌いではない。だが、その反対でもなかった。リホを傷つけたくはなかったのだ。

するとセーヤは今日のことを思い出した。

「……あの時はケン君を傷つけたくないと思って、自分の気持ちを考えていなかった」と、コトネが

言っていたことを。セーヤは彼自身の気持ちを考えてみた。すると、答えはおのずと出てきた。

「返事は……、彼女には非常に悪いんだけど……」

「……そうですね。分かってました、先輩……」

「！ その声は……！」

「ゴメンナサイ、先輩。だますつもりはなかったんです。ただ……」

リホはセーヤとコトネが抱き合っているところを見てしまったことを告げた。

「いや、あれは抱き合ってたんじゃないで……」

「……いいですよ、先輩。気をつかってくれなくても。幼なじみなんでしょ？ あのひと。でも先輩、これだけは信じて下さい。あの時、冗談なんかじゃなかったんですよ」

そう言い残して切れた。

「あの時……、そうだったのか……」

セーヤは電話を見つめていた。

「お兄ちゃん、どんな話をしていたの？」

「ん？ 別に……」

「そう、ま、いっか」

それ以来、部活の時、リホは必要以外のことをセーヤと話さなくなった。一時は同じパートの仲間も心配していたが、一週間もするといつものリホに戻っていた。

数週間過ぎ、日に日に気温が上昇して夏がすぐそこに来ていたある日、今日もうるさい五十嵐先生の声がクラス中に響いていた。しかも暑さが増し睡魔も襲う5時限目だったので、暑いしうるさいし眠いし、トリプル相乗効果でセーヤのクラスメイトは彼も含めてみなクラクラしていた。

彼の次の授業はユズカのクラスだった。もう如月サツキブームも無くなった後なのに、彼ははりきっていた。この学校内でまだサツキを追い回しているのは、もはやタダスミと彼しかいなかった。クラスメイトも普通の友達のように接してくれるようになり、ユズカもうれしかった。

5時限目終了後、ユズカは仕事のため早退することになった。その後、五十嵐先生の鬨気が体中から抜けることになったのは想像に難くない。

「……え～、今日は自習な」

鬨気を失った彼は、授業を自習にしてボーっと空をながめていた。彼のあのうるさい声が聞こえてこなくて同じ階にあるクラスの生徒はみなホッとしていた。ホッとしていたのは生徒だけではない。教師もまたホッとしていた。うるさいと授業を害されてしまうからである。

その日の帰り、いつもの道で帰っているとユズカが立っていた。

「赤吹さん。仕事にいったんじゃ……」

「……違うんです。逃げたかったんです」

「逃げたかった？」

セーヤはそのことについて詳しく聞いた。すると、信じられないことが分かった。

「実は、私、英語の五十嵐先生につけられてるみたいなんです」

「つけられてる！？ 五十嵐先生に！？ それ本当？」

「まだ確証はないんですけど、おそらく……」

「つけられてるってことは、ストーカーってことだよな。それで今までどうしてきたんです？」

「ここまで自転車できて川をボーっと見てたんです」

「それじゃあ危険ですよ」

「あ、あの、一緒に帰ってくれます？ 1人で帰るのは心細くて……」

「ええ、いいですよ」

2人は一緒に帰ることとなった。これをある2人が見ていた。

「……名誉会長！ どうしてあんな男がサツキちゃんといっしょに帰ってるんですか！？」

「う～ん、会員No. 4、そんなに顔を近づけないでくれ、暑苦しい」

「あ、すいません、名誉会長」

「それにしても、あの男、気になるな……。後で調べてみるか……」

「名誉会長！ やはりあの男はあ、あ、あれ、あれですか。あの……」

「彼氏って言いたいのか？ 会員No. 4」

「そ、そうです、名誉会長！」

「もしそうだったら、……ただじゃおかないけどな」

この2人は去っていった。セーヤとユズカは話をしながら帰った。夕日が不気味に見えた。

「ここが赤吹さんの家……？」

「そうよ」

「ふ、普通の家だなあ～」

「？ 何？」

8. 自由という名の刃

セーヤはユズカの家におじゃまになっていた。家の中には誰もいなかった。テーブルの上に、彼女の母親が書いたようなメモが置かれてあった。「夕食は何か頼んで食べておいてね」と書いてあり、そのメモの上に一万円札が一枚のっていた。家の外観も普通なら、家の内部もいたって普通だった。畳が敷いてある和室もあれば洋室だってきちんとあった。セーヤはユズカの部屋に案内された。

「へえ～、きれいなお部屋じゃないですか」

「ありがとう。あ、そうだ。何か飲みます？」

「いや、いいよ。もう帰るから」

「え？ もう帰っちゃうんですか？」

意外な言葉を言われて、彼女の部屋に置いてあったペンギンのぬいぐるみの視線でさえもゾクッと感じた。

「そ、それじゃ、もうしばらくいさせてもらおうかな」

「……えっと、……私、着がえてきますね」

そう言ってユズカはクローゼットの中から服を取り出し、部屋を出て行った。

セーヤにとって女性の部屋に入るのは、昔、コトネと遊んでいた時以来のことであった。セーヤは少しドキドキしていた。

突然、彼女の机の上に置いてあった携帯電話が鳴り出した。一瞬驚かされたものの、セーヤはすぐに立ち上がりその携帯電話を見た。

『お前はだれだ！？』

この不気味なメールの内容に、セーヤは恐くなった。

「な、何だ、コレ！？」

その時、着がえを終えたユズカが入ってきた。

「赤吹さん、変なメールが……」

「……また？」

「……またって？」

ユズカは携帯電話を取り、今きたメールを削除して言った。

「最近、いやがらせとしか思えないメールが頻繁にくるんです。最初は『サツキちゃん、ガンバ！』っていった応援のメールだったから、私の携帯番号を知ってる友達の誰かがくれたのかなって思ってたんです。でも……」

ユズカの声は震えていた。その内容もセーヤにとって恐ろしいものであり、何度も背筋が凍りついた。

「警察にはこのことを言ったんですか？」

「ううん。お母さんがダメって言うんです。『マスコミに知られるとやっかいなことになる』って……」

「……お母さんって、何の仕事をしてるんです？」

「私のマネージャーをしてるんです。今日も、打ち合わせだとかで帰ってこないんです」

「そっか……。大変ですね、お母さんも」

「……お母さん、ちっとも分かってくれてないんです。私が、いやがらせのメールや、後をつけられていて恐いの、いつも仕事のことばかり……。橋野君、今日、泊まっていてくれませんか？ 一人で家にいるのがおそろしいんです」

「へ？」

セーヤは違う意味で驚いた。

「え、他に家族はいないんですか？」

ユズカは首を縦に振った。

「そ、そんな、急に言われても……」

「お願いします！ 私、本当にこわいんです。明日は休みですし、お願いします！」

「……それなら別に僕じゃなくてもいいのでは？ 男じゃなくて、同じ女性の方が赤吹さんも心が楽でしょう？」

「でも、男の人がいないと不安なんです……」

「う～ん……」

セーヤは困った。第一、男が女の部屋に泊まるのは道徳的にもいけないことではないかと彼は考えていたのである。しかし、その間もユズカは一生懸命頼んでいた。その姿を見ると、イヤとは言えなかった。

「……それじゃあ、電話を貸してくれます？ 家に電話しないと……」

「は、はい！」

ユズカは携帯電話をさし出したか、セーヤは断り家の電話を要求した。セーヤは友達の家泊まるだけ言った。

その日の夜、先に風呂に入ったセーヤはユズカの部屋の床に敷かれた布団の上に座っていた。ユズカは風呂に入っていた。セーヤは考えていた。

「おまたせしました～」

そう言いながら、パジャマ姿のユズカが濡れた髪をタオルでふきながら入ってきた。もはやセーヤは動じなかった。しかし、彼は彼女が明るくなっていることに気がついた。

「さあ、もう寝ましようか」

そう言うと、ユズカは電気を消した。

真っ暗の中、ユズカが話しかけてきた。

「今日は私のワガママを聞いてくれてありがとうございます。久しぶりに楽しかったです。本当に、久

しぶりに……」

「……おやすみなさい、赤吹さん」

「おやすみなさい」

ユズカは寝てしまったのだが、セーヤは緊張して眠れなかった。羊を数えてもいっこうに睡魔はセーヤを襲ってくれなかった。

セーヤは起きたまま、午前2時ごろを回った。そのとき突然、バリーン！ といったガラスの割れる音が聞こえてきた。

「！ 何だ、今の……。もしかして……」

セーヤは静かにユズカを起こした。

「……どうかしましたか？」

「シッ！ 静かにして。今、窓ガラスが割れる音がしたんだ」

「え！？ それってもしかして……」

「大丈夫。大丈夫だから」

そういったセーヤ自身も震えていた。ユズカにはそれが分かっていた。しかし、2人とも恐怖をかくさずにはいられなかった。

足音が近づいてきた。無音状態での家の中で、足音だけが家中を響かせていた。その足音は何重にも重なって聞こえてきた。

「……1人ではない」

セーヤは確認をするかのように言った。

足音はユズカの部屋の戸の前で止まった。そして、戸が静かに開けられた。

「……誰もいませんよ。名誉会長」

「おかしいな……」

2人には聞き慣れた声であり、2人はすぐに気がついた。

(五十嵐先生と、……生徒会長！)

2人は窓から屋根にうつり、そっと身をひそめていた。

「家に入る前はちゃんといたのに……」

「ベッドの下にもクローゼットの中にもいませんよ、名誉会長」

「……おや？ 窓の鍵があいてる……」

2人はヤバイと思った。しかし、2人は動けなかった。動くと言ってしまうからだ。

「おい、会員No. 4。窓の外を見てこい」

会員No. 4と呼ばれた五十嵐先生は窓をあけて左右を見た。とうとう見つかってしまった！

「あ～、いた～、サツキちゃ～ん。さあ、こっちへおいで～。さあさあ……うっ！」

変な声を出したかと思うとぐったりとしてしまい、急に窓から落ちてしまった。五十嵐先生は背中から血を流しながら屋根の上をころがり、アスファルトへとたたきつけられた。

「え？ なにが起こったんだ？」

「邪魔な奴を排除しただけだよ、サツキちゃん。あいつはもういないからヤッたんだよ……」

生徒会長のタダスミの右手には、地で赤く染まったナイフを持っていた。

「う、うそ……」

「うそじゃないさ……。僕はサツキちゃん、君を迎えに来たんだよ。さあ、僕の所においで……」

タダスミはナイフをかまえながら屋根にうつった。

「さあ、おいで……。僕といっしょになろうよ。アハハ……」

無気味な顔をしてタダスミは笑った。

「いや、助けて……。やめて、ねえ、やめてよ……」

「こいつ、イカレてやがる……」

タダスミは彼女に近づいていった。

「さあ……。いっしょになろう！」

ナイフを振り下げた！ ブサッ！！

「は、橋野君……」

「大丈夫ですか……。赤、吹、さん……」

「ナンダ、キサマ……。ボクノジャマヲスルノカ……？」

「黙れ！ お前、こんなことをしてて、自分が……。ハア、自分が恥ずかしくないの……。か……。！？ ハア、ハア、こんなことをして……。赤吹さんが……。喜ぶと思ったのか！？ ……ハア、……。お前、お前は、サツキちゃんの何だ！？ ……ハア、ハア、答えろ、答えろ！！」

タダスミの動きが止まった。ユズカは叫んだ。

「ねえ、しっかりして。しっかりしてよ、橋野君！」

「ハア、ハア、ちょっと……。疲れたから……」

セーヤはぐったりしてしまった。地がドクドクと流れ出る。

「は、はやく、救急車を呼ばないと……」

しかしユズカはセーヤを支えるだけで手一杯で、呼ぶことができなかった。

「どうすれば……。どうしたらいいの……」

「……。僕が、僕がかけてくる！」

そう言ったのは、我に返ったタダスミだった。

9. 人の価値と思い

セーヤは目が覚めた。ある病院のある病室に彼はいた。窓から朝日が差し込んできて、まぶしかった。棚の上には色とりどりの鮮やかな花が、花瓶に入れられていた。ベッドのそばには小さな白い椅子が1つ置かれていた。

「ここは……」

セーヤはまだ顔がぼんやりしていた。どうして自分がここにいるのかを考えた。すると戸の開く音がした。ミキエが入ってきた。

「あ、お母さん……」

「！ セーヤ、気がついたのかい！？ よかった……、本当によかった……」

ミキエは安心したのか、涙を流してセーヤを抱いた。久しぶりに母親のにおいをかいだ。

「3日間ずっと目を覚まさないから、本当に心配したのよ。……あ！ みんなに連絡しないと」

そう言ってミキエは足早に病室を出た。

「……3日も眠っていたなんて……」

セーヤは深くため息をつき、体を起こした。静かである。回りから物音1つ聞こえなかった。朝もまだ、人々が起き出す頃のすがすがしい時刻である。昨日は雨が降ったのだろうか、アスファルトの地面には水たまりが出来ており、葉についた雫に日の光が反射して木々がきらきらと輝いていた。セーヤはふと涙が出てきた。それもまた、ほんの一滴だった。

体を動かすと腹のあたりがチクチクとした感じがして痛かった。セーヤは何かに気づいた。

「そうだ……。刺されたんだ……」

セーヤはその場所を手でさすった。うれしくなった。

ミキエが戻ってきた。

「……無茶な事して。セーヤの性格からして、まさか女の子の家に泊まるなんて……。母さん、ちっともセーヤのこと分かってなかったよ。あなたも、もう高校生になって、私の知らない所でも成長していたんだね」

「いや、それはだから、赤吹さんにストーカーにつけられてるって言われて、それで……」

「理由はともあれ、セーヤも一人の女性を体をはって助けてあげたんだ。もう、一人前の大人だよ。母さんは誇らしいよ」

「……お母さん」

「私が何も言わなくても、人として一番大切なことをあなたはちゃんと分かっているようだし……」

セーヤには分かっていた。彼は小さいときから、ミキエから同じことを言われてきた。それは「大切な人は、たとえ自分が傷ついても守れ」といったことだった。セーヤは初めて出来たのだ。

夏の朝のさわやかな風が吹き込んできて、花瓶の花がゆらゆらと揺れる。早朝の静かな空間に、自然

の音だけが聞こえる。

セーヤはチクチクした痛みを感じるたびに、自分の生を実感していた。

「まだ痛みがあるってことは、生きているってことの証拠だもんね」

ミキエは表面上ほほえんだ。

まだまだ外は明るい夕方、コトネがセーヤの見舞いにやってきた。

「失礼しまーす。……あっ！ セーヤ君、気づいたんだ」

コトネは目に涙を浮かべて駆け寄り、彼に抱きついた。

「心配してたんだからね……。3日も眠っていたんだから。死んじゃったらどうしようって思ってた。あなたが死んじゃったら、もう誰も……」

「コトネちゃん……。心配かけてゴメン。でも、もう大丈夫だから」

「……うん！」

「あらあら。お熱いわね、お二人さん。抱き合ったりなんかしちゃって」

突然、家に戻っていたミキエが戻ってきた。2人はその声に驚き、すぐに離れて赤面した。

「こ、こんにちは、おばさん」

「今日は、コトネちゃん。そうそう、セーヤ、コトネちゃんはね、あんたが眠っている間も一日も欠かさずお見舞いに来てくれたんだよ」

「そうなんだ。ありがとう、コトネちゃん」

「そんな……。別にいいですよ、おばさんも……。それに、私だけじゃないんですから。ユズにケン君に、妹のミミちゃんなんかも」

セーヤは少し照れた。それにつられたのか、コトネも少し照れた。

「そういえば、あの後はどうなったの？ 五十嵐先生や生徒会長は？」

コトネが答える。

「五十嵐先生は、セーヤ君よりも重傷だけど命に別状はないらしいよ。飛地先輩はどうなるか分かんない。でも、ユズの所属している所がうまくやってくれるらしいよ」

「……それはよかった」

そういえば、と、セーヤは考えた。最近はいろんなことが一度にたくさん起こり、こうしてゆっくりといられる時間が無かったことを。ユズカと出会い、コトネと再会し、ケンとコトネが付き合ったかと思うとコトネに本当のことを告げられ、リホに告白され、ユズカにストーカーの相談をもちかけられ、そして刺される……。と、ゆっくりと休息をとる時間がなかったようで、今のこの時間が一番身体的に安らぐ時であった。しかし、彼にはそういった今の時間が、時間を無駄に消費しているようで、なんとなくつまらなく寂しく思い、精神的にはキツイ時であった。あの時には友達と共に笑い、時には部活活動で一生懸命練習をし、時には激しく思い悩み、時には木の下で何も考えずにお昼を食べた、普通の生活

に戻ってベッドの上に縛りつけられているだけの今の生活から抜け出し、心身共に不安定になる生活に身を投じたかったのだ。

「そういえば、赤吹さんは？」

「ユズ？ ユズなら今日は仕事があってこれないみたいだけど」

「そうじゃなくて、マスコミとかに騒がれたりとかはしなかったの？」

「今のところはね。でも、まだどうなるか分からない」

「それじゃあ着がえはここに置いておくから、コトネちゃん、あとはよろしくね」

「ちょ、ちょっと待って、お母さん。……どういうこと？」

「私は家に帰って夕飯作らなきゃいけないし、3日間ずっとセーヤの看病しててやるのがたまってるの。そしたら、コトネちゃんが代わってくれるって言うからそうしてもらったのよ。あなたも見ず知らずの看護婦さんより、幼なじみのコトネちゃんとのほうが気が楽でしょう？」

「それはそうだけど……」

「それじゃあねえ～」

ミキエは明るく部屋を出ていった。

「……ゴメン、あんな母親で」

「ううん、いいの。私からもちかけたことだから」

2人は気まづくなった。

空がだいたい色に色づいてきた。

ケンが見舞いに来た。

「セーヤ、起きたか！ まあ俺はおまえが死ぬなんて思ってなかったけどな。それにしてもよかった。ハハハ」

「いつもお見舞いに来てくれたんだってね。ありがとう。いつも、部活が終わるの遅いだろうに。僕はもう大丈夫だから」

「何言ってんだって。友達だろ？ でも、サツキちゃんのファンの1人としてサツキちゃんの家泊まるっていうのは許せないけどな。でもまあ、サツキちゃんをかばったことで帳消しだ」

「ハハ、それはよかった」

「……っと。それじゃあもう帰るわ。最近うちの親が早く帰れってうるさくてな」

「うん、それじゃ」

「おう、また明日な」

もちろん彼の両親もセーヤのことを知っているが、噂として広がることを防ぐために彼の両親には何も言わないよう、ミキエが前もってケンに言っておいたのだ。セーヤにはそのことが分かっていた。

すると、入れ違いにコトネが入ってきた。

「今、ケン君が来てたんだ」

うつむきながら言った。

「彼、どんな様子だった」

「どんな様子って……、別に普通だったような……。まあ、大げさに言えば少し無理に明るくしていたようにも見えたけどね」

「……実は、私、彼と別れたんだ」

「ふ～ん。……え!？」

驚いたが、それよりもセーヤはある何らかの気持ちに心を占められていた。それは、言葉では表現できない、とても複雑なものだった。

病室に冷たい風が流れ込んできた。その風に乗って、1枚の花が入り、ベッドの上にそっとのった。コトネはその葉を取り、窓からその葉を落とすと外を見ながら言った。

「前にも言ったでしょ? 本当の気持ちに嘘はつけられないの。だって、“本当の” 気持ちなんだから……」

コトネの短い髪が風になびいた。

「だから、もう一度、この前あなたに言った言葉を言わせて?」

「……」

セーヤは無言でいた。もはや今から言われることは彼には分かっていた。

「私、セーヤ君のことが、……好き」

10. 全ては一つの物語へ

コトネは続けて言う。

「……もう、幼なじみなんて言葉で片付けられたくはないの。ただ、私は……、セーヤ君の本当の気持ちを知りたいだけ。……教えて？」

コトネは切ない顔で彼の方を見ていた。セーヤはどう答えてよいのか分からず、どう自分の思いを言葉で表現していいか分からず、コトネの姿を視界に入れずに黙りこんだ。胸の内で今セーヤは、明るく輝くジグソーパズルのピース1つ1つから、最も光っているピースをいくつか探していた。

辺りは静かになった。風も止む。時計の秒針のカチカチという音だけが、彼の病室の内で響いていた。コトネはじっとセーヤを見つめていた。目には涙が留まっていた。しかしその涙は、彼女のほおを走ることはなかった。セーヤはそんな彼女の視線が痛かった。心を貫通される、そんな視線であるように感じた。セーヤはその状況から脱出すべく、きたない手段を使った。

「しばらく……、考えさせてくれない？ まだ、自分の気持ちを整理しきっていないんだ。ちゃんと気持ちがまとまってから……、そうしたら、自分の本当の気持ち、上手く言えそうな気がする」

「……」

コトネは少し落ちこんだ表情を見せた。その顔を一瞬見ただけでセーヤは胸が苦しくなった。罪悪感がこみあげてきた。コトネは黙ったままでいた。彼はそれを「否定はしない」としかとりようがなかった。

その後、彼らは一般的会話は交わしていた。しかし、その逆は全く行われなかった。会話を交わすといっても、一文一文が短く、そしてなんとも気まずいものだった。コトネは無理にでもその暗い雰囲気打破すべく、いつも通りの明るくて素敵で彼女に戻ろうとする、そんな姿を見るとますます自分の弱さについて痛感するのだった。

「セーヤちゃん、あそぼー！」

いつものようにセーヤの家にコトネの大きな声が響く。

「今行くよー！」

と、セーヤは食べかけの朝ごはんを残しつつ、ほっぺたにごはん粒をつけて急いで玄関へ行く。

「セーヤ、もうごはんいらないの～？」

と、ミキエが尋ねる。

「いらなーい！」

と答えて、コトネといっしょに外へ遊びに行く。

「アハハ、セーヤちゃん、ごはんつぶがついてるよ」

「え？ どこどこ？」

コトネはセーヤのほっぺたについたごはん粒を取ってやる。2人は笑った。

2人の遊び場所はいつも決まっていた。家の近くに何も無い広場がある。2人はそこまで田んぼのあぜ道を通っていく。草が生い茂っており舗装されていないのであまり人が通らない道だったが、コトネが、

「ここを通ると近道なの」

と、半分嫌がっていたセーヤを強引に連れて行く。セーヤはコトネのことをいつも頼もしく思えた。彼らのひざくらいの背丈の草をふみながら、くつ下にはひつつき虫がくっついたり、蝶々が舞っていたり、最初は嫌々だった彼も次第にうれしく楽しくなっていた。なぜだか分からない、けど、ひつつき虫や蝶々だけではなかった。コトネはセーヤの手を引っぱっていく。

「コトネちゃんの手、つめたいね」

「だって、お外でセーヤちゃん待ってたんだもん。セーヤちゃんの手はあったかいね」

春もまだ始まったばかりの肌寒い風が吹く。山にはまだ白い雪が残っている。彼女の冷たい手からは、彼女の楽しさが伝わってくる。

2人は走った。コトネはセーヤの手を持って走る。コトネのほうが走るの速いから、セーヤは大変である。すると、追い風が吹いてきた。足どりは軽やかになり、冷たくて春の香りをほんの少し運んでくれて、2人は気分が快くなる。

ドテッとセーヤはころんでしまった。調子に乗りすぎてしまったのだろう。

「大丈夫！？ セーヤちゃん」

あわててコトネは駆け寄る。

「……っ、イテテテ……」

セーヤは目に涙を浮かべた。それを見るとすかさずコトネは言った。

「男の子は泣いちゃダメなんだよ～。ダメ！ 泣いちゃ」

あまりの迫力にセーヤは泣くことを恐れてしまった。すると今度は、

「うん！ セーヤちゃん、エライ！」

「エへへ……」

セーヤは服を手でパッパッと払って、流れるはずであった涙をぬぐった。彼は今のでいろいろな所にすり傷を負ってしまった。普段なら泣きわめいているところであるが、コトネのおかげである。

広場に行くまでは、彼らにとって冒険である。家の近くとはいっても、彼らには近くには感じない、彼らなりの世界が、そして彼らなりのシナリオが、物語が書かれてある。2人は広場へ向かって手をつないで走っていた。さっきころんだ傷のいたみも、楽しさのあまりふきとんでしまっていた。長い長い田んぼのあぜ道を2人は笑いながら、仲良く駆けていた。そのうち2人はつかれてきた。しかしただ単純に疲れているのではなく、うれしさに満ちていてゆえのつかれだった。

「ん……、……夢か」

セーヤは窓から入り込んできた朝日の光に目が覚めた。ふと気づくと、コトネが、高校生のコトネがセーヤに寄りかかって眠っていた。セーヤはそっと彼女のうでに触れた。ひんやりとしていた。

『だって、お外でセーヤちゃん待ってたんだもん』

夢の中でコトネが言ったこの言葉が蘇った。

「……外で待たせて悪かったね」

セーヤはそばにあった毛布をそっとコトネにかけてあげた。するとセーヤは、急に涙があふれ出してきた。止まらなかった。

『男の子は泣いちゃダメなんだよ～』

コトネに注意された言葉が頭をよぎる。

「どうして、どうして涙が……」

セーヤにはこの原因がぼんやりとではあるが分かっていた。

「コトネちゃんに泣くなって言われたのに……」

コトネは付かれきった顔で寝ている。そのつかれた、しかしやさしさのあふれ出ている顔を見ると、胸が苦しくなり、どんどん涙が出てくる。パジャマの袖で涙をぬぐうと、コトネが起きた。

「……あ、セーヤ君、おはよう」

「……おはよう」

「……！ ご、ごめん。私、眠っちゃった……。せっかくセーヤ君の看病をしに残ったのに……」

「あ、いや、いいんだ。大丈夫だから。それよりコトネちゃんは大丈夫？ 疲れた顔してるけど」

「私は大丈夫。心配しないで。……あれ、もしかしてセーヤ君、泣いてるの？」

彼女の言うとおりの、知らず知らずのうちに彼の目には再び涙であふれていた。耐えきれなくなった雫の塊が彼のほおに一本の道を作り、そして一気にその道を駆けた。

「……どうしたの？ セーヤ君……」

コトネのこの問いかけにセーヤは無言を保つしかなかった。というのは、その答えを口に出すことが彼には出来なかったから、つまり、ちゃんとした言葉で言えなかったのである。この態度にコトネは少しも動揺することはなかった。彼女には分かっていた。何かきっかけを彼に与えたかった。彼女はあえて昨日の質問を繰り返し尋ねようとは思わなかった。セーヤから言い出してほしただけだった。

しばらくしてセーヤは落ち着くと、コトネに向かって言いだした。

「コトネちゃん」

「ん、何？」

コトネは普段通りにしていた。いたって特殊な変化はない。

「あ、雨……」

コトネが言った通りに雨が降ってきた。青空は見えているのに雨粒が落ちてくる。まるで、彼らの心

情を表しているようだった。

「それで、何？ セーヤ君」

コトネは再び尋ねた。彼女の口調は妙に明るかった。そして彼女は微笑んだ。

「……いや、なんでもない。……ゴメン」

セーヤは自分自身がくやしかった。もう答えは出ているのに何かが足りなかった。その何かが彼の勇気という名の戦士と闘っていた。

朝も10時を過ぎた頃、彼の所にミキエとミミが入ってきた。コトネが2人とあいさつを交わすと、セーヤは何かに気づいた。

「そういえば……、2人とも学校は？」

「今日は日曜よ、お兄ちゃん」

「コトネちゃん、ごくろうさま。疲れたでしょ？ 後は私たちがやるから、家に帰って疲れをとるといわ」

「いや……、そうですね」

するとコトネはペコリと一礼をして、

「それじゃあね、セーヤ君」

というと、部屋を出て行った。

その時、ユズカが彼の病室へと足を運んでいた。病院内の廊下でユズカはコトネとすれちがった。

「あっ、コトネちゃ……ん？」

コトネがいつもと違った表情をしているのに気付いた。ユズカはしばらくの間硬直した後、我に返って病室には入ることなくコトネを追った。

「コトネちゃん？」

彼女は静かに呼ばれた方へ振り向いた。その表情は何かを思いつめたような、ものすごく悲しそうでユズカの方にもその気持ちが伝わってくるほどだった。

「あ……、ユズ……」

「いったいどうしたの？ 何か変よ、大丈夫？」

「……大丈夫、……じゃないよ」

「えっ？」

その時ユズカは声を失った。めったに見せることのない、コトネが小粒の涙を流していた。

「全然、大丈夫なんかじゃないよ……」

涙が床に落ちる。

「何があったか、私に話してくれる？」

「……子供の頃からの願い事が、かないそうにないの」

そうとだけ答えると、コトネは彼女に背を向けて逃げるようにそそくさと行ってしまった。その後ろ姿には不安の2文字が、まさにぴったりと当てはまるようだとユズカは感じた。

コトネが見えなくなるまで見送ったあと、ユズカはセーヤのいる病室へ入った。

「こんにちは。お見舞いに来ました」

「赤吹さん！ 今、コトネちゃんと会わなかった？」

「え、ええ、今そこで会いましたけど……、何かあったんですか？ コトネちゃん。彼女、泣いてましたよ。めったに泣いたりなんかしないのに……」

「セーヤ、もしかして何かやったのかい！？」

ミキエが入ると話がややこしくなるため、セーヤは母親をまず黙らせた。次に、ユズカに事情を小声で説明した。

「実は、告白されたんだ、コトネちゃんに」

「！？」

思いもよらない発言にユズカは驚いた。そして、チクツとした痛みを覚えた。

「僕はまだ答えていない。情けない男だよ。答えはもう決まっているのに……。ハア、そういえばあんな日があったなあ」

「……あんな日？」

ユズカが尋ねた。セーヤは窓から青い、青い空を見ていった。

「……僕がまだ小さかった頃、コトネちゃんといっしょに遊んでいた夢を見たんです。その夢の中では、空は今日のよりも、もっともっと青かったのに……」

しばらく、ほんの数秒の両者の沈黙のあと、ユズカは言った。

「橋野君、覚えていますか？ 私が本当は如月サツキだと告白した時のことを。どうして本当のことを言ったと思います？ それは、私はあなたに信頼されていると感じたからなんです。信頼っていっても、辞書に載ってるような意味じゃなくて、なんて言うのかな……。 “関係”みたいなものなんです。橋野君はコトネちゃんに信頼されていると感じますか？」

「コトネちゃんが、僕に信頼……？」

セーヤはこの言葉の意味が心につかかった。ユズカは続けて言った。

「そうです。それを感じていれば、あとは自然と……。……ありがとうございました」

「えっ？」

「い、いや、こっちの話です。……あっ、もう時間なんで今日はこれで……」

「そう。僕のお見舞いなんかに来てくれてありがとう。また今度」

「はい。その時に、また積もる話でも」

ユズカはそう言って、ミキエとミミにあいさつした後、病室を出た。

「……ハア、私じゃ当分かないそうにないわ……」

病室の中では、家族の3人が楽しく会話をしていた。しかしセーヤはさつきからつかかっているものが、気になって気になってしょうがなかった。

「……幼なじみ、……か」

数日後、セーヤは退院し学校へ行った。そして徐々に心身共に不安定になる生活に身を浸し、楽しんだ。病院内での退屈だったからっぽな心に、いつしか喜びが満たされていった。しかし、逆に彼の自由は束縛されることとなったが、彼にとっては苦痛でなかった。

放課後、セーヤはコトネを呼び出した。誰もいない場所へ。そして2人は向き合った。

「な〜に？ セーヤ君」

「……ようやく僕の心の中で整理ができたんだ。だから聞いてほしい。僕の気持ちを」

コトネは胸がドキドキと高鳴っていた。それはセーヤでも同じことである。

「……僕は、余計なことを考えすぎていたんだよね。コトネちゃんとは幼なじみだからだとか、コトネちゃんが僕に言った『好き』っていう言葉の価値とか。でも、そんなのはじめからどうでもよかったんだ。コトネちゃんの言うとおりに、自分に正直な気持ち、これたった1つだけでよかった。そのことをはっきりと僕に教えてくれたのは赤吹さんだった。彼女は僕に、『コトネちゃんに信頼されていると感じますか』って言った。するとある言葉が脳裏に浮かんだんだよ。それは“幼なじみ”っていう言葉。この言葉の意味は昔馴染みの友人ではない。ずっと昔から愛している、そして今でも、今からもずっと愛してゆける人であるってね」

「じゃあ、それじゃあ……」

コトネは胸に両手を重ね合わせた。そして昔から待ち望んでいた言葉を、今聞ける！

「うん。僕も、コトネちゃんのこと、好き」

コトネはセーヤに抱きついた。そしてセーヤもコトネを抱いた。

「……ありがとう、セーヤ君」

——6年後。

橋野ミミ。彼女は遠くの大学に通っているため、その大学の寮で生活中。実家に帰ってくるのはお盆と正月のみの2回だけで、両親は不安ではあるが、彼女はしっかり者だからちゃんとしているだろうと思っている。彼氏であるミツルとは今でも恋愛中。しかし、遠距離恋愛であるため、少し寂しいのもまた事実。

赤吹ユズカ。彼女は女優と歌手の両方を担っていて、毎日がハードスケジュール。1人の女として清き恋愛もしておらず、するのはいつもドラマの中での偽りの恋愛のみ。当の本人としては、恋愛はもっ

と落ち着いてからとのこと。今はこの不安定な生活がつかれるものの大好きだ。

石部ケン。彼は自慢の足を利用した仕事に就きたいと思っていたものの、そんな仕事は無いので、炎と闘う者、消防士としてこの都市を火の恐怖から守っている。使うことの無いと思っていた足が、閉じ込められた人を助けるのに役に立つことを知り、今は充実した生活を送っている。

秋瀬リホ。彼女はその類い稀な音楽のセンスを用いて、もっと音楽のすばらしさを知ってもらおうと音楽の教師になるために勉強中。教育実習に行っていた時に生徒たちからコメントの書いてある色紙をもらって、すごく感動したとか。きっといい教師になれよう。

天念ミツル。彼は近くの大学に合格し、今は大学でストップウォッチについて、ではなく、どうして自分は10秒ジャストが出せないかについて分析している。つまり、精神・心理学を学んでいるわけだが、未だに10秒を出せずに研究も一向に進んでいないようだ。

飛地タダスミ。彼は過去の自分の過ちを自ら裁くべく、裁判官の勉強をしている真っ最中。難関の司法試験に受かることができず苦勞している。

五十嵐ミツグ。彼はどうも教師としての最盛期を終えたのだろうか、あれだけうるさかった声が日に日に小さくなっていく。とうとう落ちついたか。

そしてあの2人。

「コトネちゃん、準備はできた？」

ドア越しに話しかける。

「うん、いいよ。セーヤ君、入ってきて」

セーヤはドアを開け部屋の中に入った。そしてコトネの姿を見た。真っ白いドレスに身を包まれている。

「……、すごく似合ってるよ、そのウエディングドレス。きれいだよ」

「フフ、ありがと。そういうセーヤ君こそ、そのタキシード、かっこいいわよ」

「……、さあ、行こうか」

セーヤが手を差しのべた。その上にスッと手を置く。

「ええ」

コトネの昔からの夢。それはセーヤちゃんのお嫁さんになること。長い年月を経て、それが今達成されようとしている。

2人は歩きはじめた。向かう先は2人の未来。

学生時代の懐かしい思い出を胸に。

少年の心は、数多くの経験をもとにたくさんの変化をした。

小さかった男の子の、変わる心の物語は、今、次のページへと進むのです。

あとがき

当時執筆していたこの作品をこういう形で再び読んでみると、ほんとに文をつなげていったら文章になったような感じがしています。初めて書いた作品なので、稚拙といえましょうね。

特殊な環境から話の続きを書くときに前の話の内容をあんまり覚えておらず、その上設定も全然考えてなかったストーリーも行き当たりばったりで書いてたりと今だから言えるのですが、執筆していた当時はいい出来だと思っけていても今読むと矛盾なところがチラホラと。今回デジタルに書き起こしましたがそういった部分は全く修正せず、誤字とパラグラフを修正したのみの言わば“完全原作”となっています。きちんと加筆・修正したものは、“OrdinarieS”として現在執筆中です。

物語としては、結局幼なじみとくつつくという大王道のシナリオだったんですが、この物語だけを読めば、コトネとくつつくよりもユズカとくつついた方がしっくりきたのかもしれませんが。ユズカがセーヤのことを好きになる理由が、コトネがセーヤのことを好きになる理由よりも本文中に述べられているからです。「えっ、何でコトネと引っ付きちゃったの？」って疑問を思った方がいれば、それは読みが正しいのかもしれませんが。リホもセーヤのことが好きでしたが、彼女にいたっては全く書かれていませんし。

主人公のセーヤについてですが、僕に考え方が似ていると突っ込みをいれられたことがあります。その時は否定していましたが、正直言えば僕自身とかぶせていましたね。初めての作品、新たにキャラクターを作るよりも僕がよく知るキャラクターを利用して書いたほうが書きやすかったという理由からです。それが結局、自分だったってことです。しかし回数を経るにしたがって、セーヤのキャラクターが僕から離れて独自のキャラクターを生むに至ったことと思っています。

結局この作品、何を書きたかったのかいまいち分からないかもしれませんが、こういう物語もあるものだ、というほどに捉えてくれるといいのかもしれませんが。実際にセーヤになってこの世界を体験する、それでいいのかもしれませんが。小説って、そんなものでしょう？

作者 Koichi (執筆時のペンネーム スクラッチ岩尾) 2005年4月21日 記す

Copyright (c) 2001-2005 Koichi All right reserved.

付録1. 執筆日時

1. 2001年5月30日(水)
2. 2001年6月8日(金)
3. 2001年6月25日(月)
4. 2001年7月19日(火)
5. 2001年7月26日(木)
6. 2001年8月20日(月)
7. 2001年8月30日(木)
8. 2001年9月11日(火)
9. 2001年9月25日(火)
10. 2001年11月5日(月)

付録2. キャラクタープロフィール

1. 橋野セーヤ 10月12日生まれ 男
- | | | | |
|--------|---------------|--------|-------|
| 好きな教科 | 化学、物理 | 嫌いな教科 | 体育、数学 |
| 好きな食べ物 | レモン | 嫌いな食べ物 | 海藻、納豆 |
| 性格 | 内気、シャイ | | |
| 趣味 | 日向ぼっこ、パソコンいじり | | |
| 特技 | 特になし | | |

高原高等学校2年3組8番の生徒で理系。小学3年生のときに丸練から高原へ、父カズマの仕事の都合で引っ越す。

理科が得意なため理系を選択。だが、大事な数学が苦手という一長一短な人。

運動が苦手が目立つこともなく、クラスの中では地味な存在であり、さえない。

成績はあまり良いとは言えない。というのは、橋野家は「好きなことをさせ、他人はあまり関与しない」という教育方針からも分かる。

集中すると周りが見えなくなる、と、クラスメイト談。

2. 橋野ミミ 4月23日生まれ 女
- | | | | |
|--------|-----------|--------|------|
| 好きな教科 | 英語、美術 | 嫌いな教科 | 特になし |
| 好きな食べ物 | 果物（特にリンゴ） | 嫌いな食べ物 | トマト |
| 性格 | 温和、兄思い | | |
| 趣味 | お菓子作り | | |
| 特技 | クッキーを作ること | | |

高原中学校に通う、中3の中学生。橋野セーヤの妹。同い年の彼氏がいる。

兄とは逆にオールマイティな能力の彼女は、特に美術が得意で、写生をさせたら非常にそっくりに描くことが出来る。

また、他生徒からの信頼も厚くクラスの風紀委員として仕事をこなしているほか、その華麗さからクラスの女生徒からも注目を浴びている。

しかしそんな彼女でも、分からない問題などを兄に教えてもらうことに妹らしさが見える。

3. 赤吹ユズカ 3月4日生まれ 女
- | | | | |
|--------|---------|--------|----------|
| 好きな教科 | 数学、英語 | 嫌いな教科 | 国語 |
| 好きな食べ物 | ショートケーキ | 嫌いな食べ物 | コテコテしたもの |

性格 感情を表に出しやすい

趣味 カラオケ

特技 甘味だいすき

如月サツキという芸名で今、人気急上昇中の歌手である彼女。歌っている姿からは想像出てないくらい、実際は物腰が低い彼女。ニックネームはユズ。

芸名は名のとおり、授業で陰暦の月の呼び方を習ったときに、彼女が一番響きの気に入っていた、2月と5月の“如月”と“皐月”から引用。

芸能界への進出とともに子供心を捨て去るとちかった彼女。しかし、セーヤのとった行動に耐え切れずに涙を流してしまうところに、誓った代償の重さを感じさせる。

4. 野原コトネ 8月22日生まれ 女

好きな教科 音楽、体育 嫌いな教科 数学

好きな食べ物 ブルーベリィ 嫌いな食べ物 かぼちゃ

性格 明るく、正義感が強い

趣味 昼寝、自転車

特技 ジャンケンが強い

寝る子は育つ典型的娘。セーヤの幼なじみ。とにかく活発的で、セーヤを引っ張り出しては半ば強制的にいっしょに遊んでいた。

セーヤが引っ越した後の数日間は、旧橋野家のセーヤの部屋に入っししみじみ寂しくなっていた。女性らしさのあふれる一面である。

ユズカとはいとこ関係にあり、実はセーヤも以前2、3回ユズカとは会っていた。ユズカがデビューしたことを知ったとき、真っ先に電話で2人喜び合ったのは言うまでもない。

5. 石部ケン 6月6日生まれ 男

好きな教科 体育（短距離） 嫌いな教科 体育以外（特に英語）

好きな食べ物 なんでも 嫌いな食べ物 なす

性格 明るく、活発

趣味 如月サツキコレクション、走ること

特技 短距離、逃走

橋野セーヤの親友。かつ、如月サツキファンで、いろいろな如月サツキに関するものを買っては喜ぶちょっとアブなめの陸上部員。短距離の速さから運動会などでは期待されまくりで、意外

と女性ファンが多いのだが、自分が思いのある人としか付き合わないといったちょっとかための彼。

しかし逆にそれ以外ではんでダメで、いつもテストなどでは苦労しているとか。

セーヤにはいつもやさしく接してくれているが、勘違いをしやすく、時にはそれが原因で怒ることも……。

6. 秋瀬リホ 4月30日生まれ 女
- | | | | |
|--------|-----------|--------|-------|
| 好きな教科 | 芸術、英語 | 嫌いな教科 | 数学 |
| 好きな食べ物 | ようかん | 嫌いな食べ物 | こんにゃく |
| 性格 | 明朗だが心配性 | | |
| 趣味 | 茶道（飲むだけ） | | |
| 特技 | 思い込みのはげしさ | | |

吹奏楽部でフルートを吹く1年1組の彼女。音感、リズム感に長け、昔はピアノを習っていたために、音楽にはそれ相応の知識と技術を持っている。そのため吹奏楽部に入ったのだろうか。それとも他の理由があったのだろうか。意外に交友関係は広い。

以前まで髪を短くしていたのだが、中学時代、片思いだった人に長い方がかわいいんじゃないと言われたのをきっかけとして長くしている、との説も。

7. 天念ミツル 12月10日生まれ 男
- | | | | |
|--------|---------------------------|--------|-------|
| 好きな教科 | 美術、技術 | 嫌いな教科 | 国語、家庭 |
| 好きな食べ物 | コーラ | 嫌いな食べ物 | たくあん |
| 性格 | ズバズバ言う | | |
| 趣味 | 夜空観察 | | |
| 特技 | ストップウォッチを見ずに10秒どうしても出せない。 | | |

橋野ミミの彼氏であり同級生。秋瀬リホと幼なじみであり、彼女のことを（リホ）お姉ちゃんと呼ぶ。

もちろん、ミミへは彼から告白したのだが、それが成功して、その時以来内気だった性格に少しずつ変化があらわれてきた。

手先が器用なため物を作る作業が好きだが、10秒をどうしても出せないのはなぜなのか？初めはウケを狙っていたようだが……。

8. 飛地タダスミ 3月5日生まれ 男

好きな教科 数学 嫌いな教科 臭い教科
 好きな食べ物 ほうれんそう 嫌いな食べ物 鉄臭いもの
 性格 明朗だが信じやすい
 趣味 如月サツキの全て
 特技 「如月サツキのこと100問答えたら100万円」なら必ず100万円とる。

表の顔は高原高等学校の生徒会長で、生徒からも先生からも信頼の厚い人。しかし、裏の顔は如月サツキファンクラブ会員No. 0であり、ファンクラブの名誉会長でもある。誰よりも早く彼女のすばらしさに目をつけ名誉会長となり、下に多くの下僕（会員）がいる。その中には先生の姿もあり、年齢層は大きい。

本編で彼は人を刺してしまったが、その時の彼の本当の心はどうだったのか。それは彼にしか分からないのかもしれない。

9. 五十嵐ミツグ 1月2日生まれ 男
 教える教科 英語 苦手とした教科 芸術
 好きな酒 ウィスキー、日本酒 嫌いな女性の性格 わがまま
 休暇の過ごし方 ごろ寝、そして邪魔者扱い
 家族構成 妻、娘2人
 プロポーズの言葉 俺を君の愛で育ててくれ

高原高等学校英語科教諭。しかし英検は受けたことがなく、無級。

彼の授業は確かに分かりやすい。丁寧に教えてくれるのだが、彼の声があまりに loudly なために、全然理解できない生徒もけっこういる。そんなことに彼は気付いていない。酔いしれている。

また、如月サツキファンクラブの会員No. 4という、教師とは思えない一面を持つ。こんな奴が教師でいいのだろうか？

※ これらは、原作で各話の最後に紹介していたものと同じです。

※ キャラクターイメージは割愛させていただきました。